

# 地球を 読む

東南アジア諸国連合(ASEAN)はいまや、世界の成長の核となっている。経済成長率は、大きな調整を迫られている中国をしるぐ。この強さはどこからきているのだろうか。

加盟国は10を数え、総面積450万平方キロメートル(世界全体の3.2%)に、6億8000万人(同8.5%)の人々が暮らす。域内

の国内総生産(GDP)の合計は、世界3、4位のドイツや日本に匹敵する。特にインドネシアのGDPは、今後二十数年で日本を抜く可能性があると言われている。1人当たりGDPが日

本よりの高い国が2か国あることを、多くの日本人が知らないのではないかと。アジアでは20世紀最後の25年、かなり緊密なサプライチェーン(供給網)が構築された。当時は、日本が

の良い見本とされた。しかし21世紀に入り、中国は国土面積や人口からみて「一つの大陸」である利点を生かすようになった。自国内に単独の供給体制を形成し、他国との摩擦を強

る必要がある。日本はこれまで独占していた企画、デザイン部門を開放しつつ、資金供給や自由貿易体制の維持といった点で重要な役割を果たして

る必要がある。例えば、米国のスマホ輸入の相手先として、ベトナムがランキングを大幅に上昇させている。米国が中国製の電子機器の輸入に制約をかけている中で、「中国産」「香港積み出し」などの表示を逃れようと、韓国資本、あるいは米国資本と共同した中国資本の会社が、生産拠点を中国からベトナムに移しているのが主因だ。



渡辺 博史

国際通貨研究所  
理事長

## ASEAN

### アジアの供給網 複線化

企画とデザインの核機能を実現し、韓国、台湾、香港、シンガポールがその実行を促進した。東南アジア各国は部品などの中間財を作り、中国が最終組み立てを担った。この体制は、経済成長を実現する地域協力を

めていった。アジアの供給網は現在、複線化しつつある。韓国から日本、台湾、ASEAN、さらにオーストラリアとニュージーランドをつなぐ「西太平洋サプライチェーン」へと再編成し、強化す

果も生じさせている。日本を含むアジア全域に影響を与えているのが、米中間のデリスキング(リスク低減)である。様々なマインナス効果をもたらしているのは言うまでもないが、一方で副次的にプラスの効果

ASEANの中で中国への対立姿勢が最も強硬なベトナムが、こうした「漁夫の利」を得ているのは皮肉なものである。

△2面に続く▽

# 地球を 読む

1面の続き

渡辺博史氏 1949年生  
まれ。財務省国際局長、財務  
官、国際協力銀行総裁などを  
経て2016年10月から現  
職。経済に関する著作多数。

ASEANの経済動向は  
今後、どうなるのか。

米国の利上げに起因する  
高金利によって、調達金利  
の上昇や調達金額の縮減な  
どの負荷がかかっている。  
それでもしばらくは、世界  
成長を引っ張るプロモータ  
ーとしての地位は保ち続け  
るとの分析が多い。

交易構造を見ると、域外  
の先進国および中国との輸  
出入が8割程度と極めて高  
い割合を占める一方、域内  
の貿易の比率は低い。ASEAN  
で中産階級が今後、  
2億人前後に増えることを  
考えれば、ブランド力の創  
造も含めて域内貿易の拡大  
が大きな課題となる。

ASEANの多様性も、  
様々な課題への耐性を生み  
出している。

世界人口は現在の約80億  
人から2050年には10  
0億人近くに増える見通し  
だ。食料の確保は一段と重  
要な問題となる。ASEAN  
Nの食料自給率が極めて高  
きく変容したのである。

ASEANの多様性も、  
様々な課題への耐性を生み  
出している。

## 対等な友人 共に発展を

いのは強みとなろう。

地理的な利点もある。世  
界経済で今後、重要な2本  
柱となる中国とインドの間  
に位置している。中印両国  
は、さまざまな歴史的要因  
もあって完全融和にはたど  
り着きにくい。ASEAN  
は中印と上手にバランスを  
保ちながら、それぞれの  
連携体制を構築していける  
可能性がある。

ASEANの多様性も、  
様々な課題への耐性を生み  
出している。

会場を見渡すと、計26人  
のうち男女が13人ずつと同  
数だった。日韓は4人全員  
が男性だった一方、ASEAN  
のうちの2か国は4人  
とも女性だった。こうした  
女性の活躍はASEANの  
多くの国で見られる。

日本人は、自らを生得の  
アジア人だと思いがちだ。  
しかし、中国など大陸の国  
田ドクトリン」である。

ポイントには、①日本は軍  
事大国にならない②真の友  
人として心と心の触れあう  
信頼関係を構築する③対等  
なパートナーとして東南ア  
ジア全域の平和と繁栄に寄  
与する一である。

近隣諸国との摩擦が絶え  
ない中国とは異なり、日本  
の発した3原則はある種の  
「安心感」を醸し出してい  
る。これらの原則に基づい  
て日本は、域内の行き過ぎ  
た経済不均衡の是正や、国  
境を超えた連結性の向上に

ASEANの多様性も、  
様々な課題への耐性を生み  
出している。

第2次世界大戦期、アジ  
アの国々との間に不幸な歴  
史があった。これを日本人  
が忘れたとしても、先方は  
忘れない。対日戦勝記念日  
を祝う国は今も厳存する。  
この壁を乗り越えるため  
の一つのメッセージが、1  
977年に当時の福田赳夫  
首相がマニラで表明した東  
南アジア外交の3原則「福  
田ドクトリン」である。

ASEANは安全保障お  
よび経済圏の維持のため、  
日米豪や中印などの各国と  
極力、等距離を維持しよう  
とするだろう。

同時に、各国の強みを最  
大限に取り込む政策を、さ  
らに強化する方向にある。  
これはある意味、当然かつ  
正しいスタンスだ。

ASEANの動向にうまく寄り添  
いながら、今後の戦略を考  
え、明確に発信していく必  
要がある。

ASEANの多様性も、  
様々な課題への耐性を生み  
出している。

英文は金曜日のジャパン・  
ニュースに掲載予定です